

阿波國 すきま 漫遊記

VOL.20 棚田

【取材・文・写真】 深草 縁夫

関東出身・徳島在住のサラリーマン。2000年からサイト『日本すきま漫遊記』を開発・公開。日本各地の寺・神社を中心として、一般には大々的に取りだたされることのないようなマイナー観光スポットをめぐり紹介している。■日本すきま漫遊記 <http://www.sukima.com>



■三好市井川町・下影

日本の棚田百選に選ばれた、県内では有名な棚田だ。30枚、1.1ヘクタールの面積、斜度は1/4だという。周田の急傾斜集落の景観を含め、四国らしい景観。

日本の棚田百選

棚田とは傾斜地に段々を築いて作られた田んぼのことだが、厳密にいえば農水省では傾斜1/20以上の田んぼを棚田と定義している。その基準によれば全国の水田の面積の8%は棚田なのだ。もっとも、これから紹介する棚田は傾斜1/4やそれ以上の急傾斜の田んぼだ。

1999年に農水省は「日本の棚田百選」という田んぼを選定した。徳島県では椋原と下影の2箇所が選ばれている。棚田百選に選ばれるには、合計1ヘクタール以上の耕作面積があり、棚田の保全に積極的であるという条件が必要だった。その条件に漏れた田んぼであっても、規模や景観からみて棚田百選級の棚田が県内にはいくつもあ



▲上勝町・椋原

日本の棚田百選に選ばれている。景観のすばらしさは横綱の貫録。546枚、5.5ヘクタールの面積、斜度は1/4。水車小屋が作られたり、保全活動も活発。徳島を代表する棚田だ。



▲上勝町・府殿

椋原の棚田からも近い。4.4ヘクタールもある大規模な棚田。上勝町にはすばらしい棚田が多いが、その中でも屈指のもの。「棚田百選級」の物件。以前の号で紹介した非観光の水車小屋もこの一角にある。



▲佐那河内村・東府能

全国の名だたる棚田と比べても遜色ない景観だ。稲刈りの季節になると田んぼで稲を干す「ハデ(はき掛け)」の風景が美しい。徳島市内から車で30分程度で行ける場所なので、ぜひ訪れたい。

棚田はどこにある

棚田は吉野川の南側の市町村に多い。その理由は、吉野川の南側は変

帯という地質で急峻な斜面に集落が多いこと、多雨地帯のため水田が作りやすかったことが関係しているのだから。棚田の法面(のりめん)の築き方は、石垣と土坡(どほ)の2通りがあるが、県内の棚田はほとんどが石垣だ。これも変成岩が得やすい地質に大いに関係している。



▲那賀町拝宮

石垣の例。拝宮は田んぼの中に家ほどもあるような巨石が点在する「石の集落」。当然、棚田の法面もすべて石積みだ。拝宮の石積みは角度が急でほぼ垂直に近い。



▲つるぎ町半田東麓

土坡(どほ)の例。このように田んぼの法面を土だけで作ったものを土坡という。土坡の棚田は東日本に多く、石垣の棚田は西日本に多い。



▲三好市白地中尾

湧き水を田に引くとき、そのまま田に入ると水溜りが低く稲の育ちが悪くなるので、田の縁に小さい水路を作り、水を廻して暖める。「ネキアゼ」と言うそうだ。



▲神山町上分江田

最近、菜の花で町おこしをしている神山の棚田。地形上、見晴らしがよく、棚田を一望にできるのがうれしい。神山町には他にも多くの棚田がある。

棚田の価値

棚田の耕作には平地の田の1.6倍の労働が必要だという古い調査がある。大型機械の導入が進んだ現代ではも

と差が広がっているはずだ。単にコメの生産というだけで見たら棚田は効率の悪い場所なのだ。「効率」とは言い換えれば「いかに安くモノを作るか」ということだ。戦後の日本人は効率というモノサシで何もかもを計るようになってきた。その代償として、モノサシで計れないストレスという重荷を際限なく背負い込む社会を作ってきた。もし棚田の価値を計ると思ったら、まったく違ったモノサシが必要となるだろう。この田を築いた先人の苦勞を思い、美しい景観を未来に残していくことに価値を見いだせるような時代は来るのだろうか。



▲つるぎ町半田東麓

棚田には小さな田んぼが多い。田植えをしようとしても田が見つからず、牛をどかせたら下から田んぼが出てきたという話もあるほど。



▲那賀町音谷

個人が耕作している小さな棚田だが、細長い階段のような作りがおもしろい。稲穂が実る時は、杉山の緑とのコントラストがとくにきれいだ。



▲那賀町馬路

まるで城の天守台のような石垣。この上が田んぼになっている。これならインシヤシカの獣害からの防御も完璧だろう。



▲佐那河内村・東府能

等高線そのままに巾着のようなカーブを描く。棚田は、自然を打ち負かすのではなく、自然に逆らわずに作られた農地なのだ。